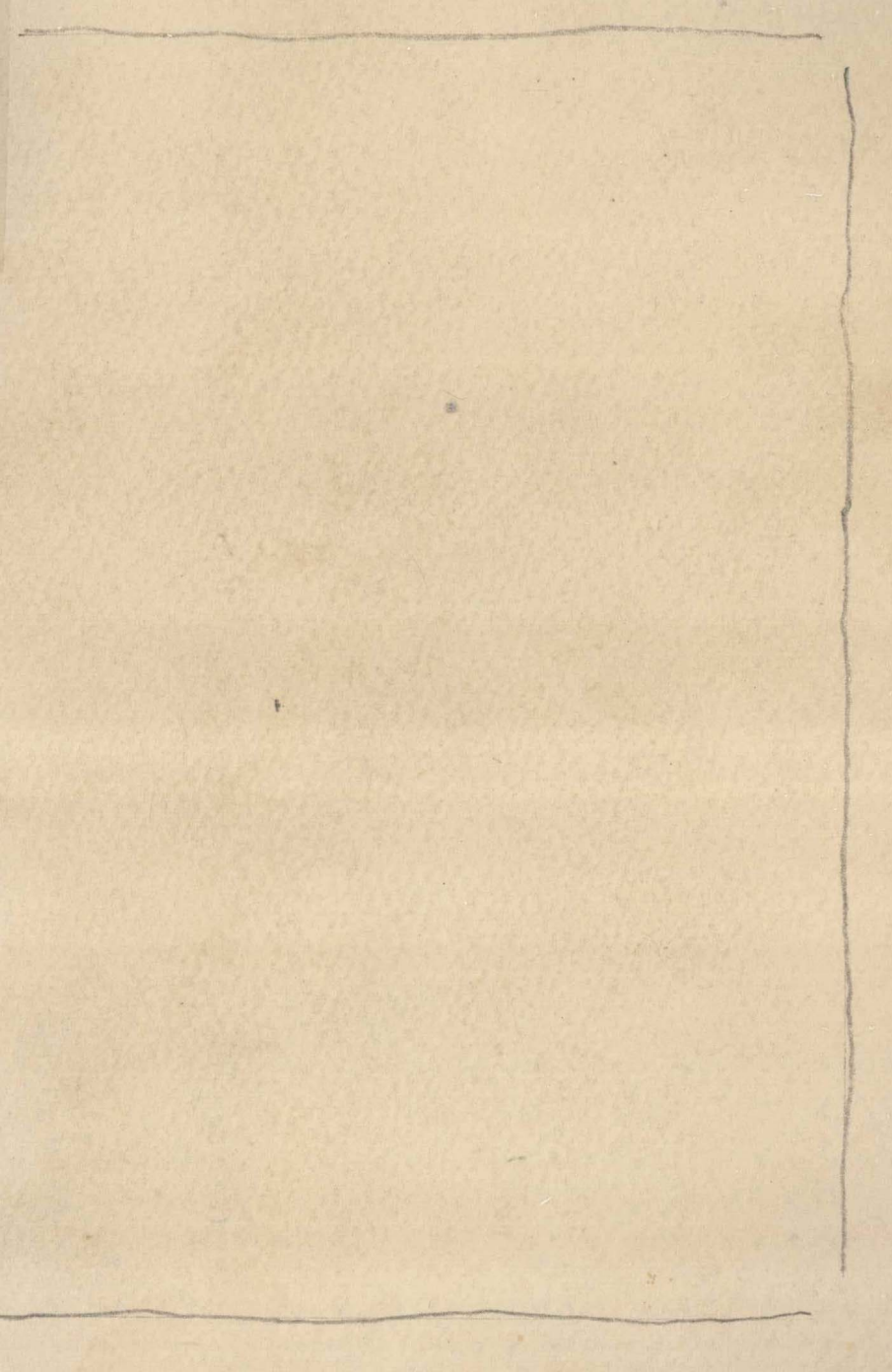




藁のおとし穴

坂上弘

河出書房新社



藁のおとし穴

昭和四十九年十月二十日

初版印刷

昭和四十九年十月二十五日

初版発行

著者 坂上 弘

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二電話二九二一三七一一

印刷 暁印刷

製本 中西製本

©1974 HIROSHI SAKAGAMI

定価は帯・箱に表示してあります

目次

夏の朝／
7

あげは／
43

週末／
59

田舎の眼／
87

午後の終り／
111

売る男／
157

藁のおとし穴／
197

装幀／高松次郎

藁のおとし穴

夏の朝

散歩に行くことは前の日子供と約束しておいた。

そのせいで子供に早くから起こされたので、私は煙草とマッチをもって眠い目をこすりながら表へ出た。とにかく暑い朝だ。子供について路地を歩き出す。さいわい車も通らない。六歳になる子供が車にぶつかることは日曜日の朝ならないだろうが、用心する癖は私のもっとも単純な癖である。目に強い明るさがとびこんで来て二日酔いのときのように痛い。煙草に火をつける。いがらっぽい味を舌にかんじる。もう咽喉が乾いてくる暑さだ。私は眠い目で近所の様子を眺めながら歩く。鳶ののびた大谷石の塀や桜の樹の繁り具合や、窓を開けてカーテンをひらめかせているまだ眠っているにちがいないマンションの部屋を見上げながら。アスファルトの路上には嘘のように

誰もいない。道端の隙間からはえた雑草に自分の見覚えのあるものが目にとまると子供に教えてやる。親のそんな癖のせいで草のおもしろさに一緒になって注目する幼児。

この住宅街は私の曾て育った町なのだ。これは子供にはまだわからない。私の父は銀行員だったので二年目ごとに東京を出たり入ったりしていた。したがって私たちには生まれ故郷という実感のあるところはない。この渋谷に近い丘の上の住宅地はそういう遷りかわったなかで私が小学校に上るまで住んでいた比較的長い住居の一つだ。

私が会社で就職して間もなく、高校生の弟を預ることになって、弟の通学に便利なところといって妻が偶然探して来たアパートが自分のむかし育った近所だと知ったとき、私はある疎ましささえ覚えたことは事実だ。そこなら見る必要はない、と私は妻に言った。私の口調が変にぶっきらぼうだったので彼女は、夜だけどちゃんと中を見せてもらって来たしいままで探したうちではいちばんマシよ、と力むように説明した。彼女の言う通りその間取りは二間でそのうちの一つを弟の部屋に使っても広く使えたが、それから十年も住んでしまったのは、この山の手が年々便利になって来たからだけではなく、自分のどこかに帰巢感覚というものができ上って来たからだろう。

路が自然に下りになって行く住宅街を私は子供をうながして歩く。オリンピックを境にしてみるみる住宅の様子が違って来た。三階、四階建の鉄筋アパートが多くなり自家用車も多くなった。バレエの学校とか洋服店の類もできて通る人々も華やかになった。だが私が一廻りしたいのはこの洋菓子が並んでいるような目新しい住宅街ではない。ただらした坂道を下りきったところに狭い路地がある。この辺が自分たちのもと住んでいたところだと思う地形がある。車が一台抜けられるくらいの幅の、いまの私にはすべてがごみごみ感じられる路地だ。以前の家のは一段低くなっていてそこに湿っぽい裏庭があった。どうもそれを想わせる一角がある。私はこのごろここが自分の育ったところだという想念が離れなくなっている。それを疑う点は、何回もの散歩ですっかりなくなっている。ひとが見ていたら、その辺りで低いブロック塀越しにじろじろ眺めている男を胡散臭く思うかもしれない。もちろん同じような路地が他にないわけではない。戦災後に地割りや路地の様子が一変していることも考えられる。ほんの一米程の段のついた地形など昔のままでという保証はどこにもない。『穂田』というむかしの町名もかわっている。事実、その辺りに来ると、ああここだな、ここ

に違いないなどと思う割には、目印になる樹一本壁一つあるわけではないのだ。もちろん三十年も前に住んだことのあるところが確かめられてもどうと言うこともないのはわかつている。当時の思い出が戻って来ることはわるいことではないが、自分が積極的にそれをさがし出して信じたりする人間だとは思えない。こうした散策めいた習慣がついたのも子供がうまれてからなのだ。

私は路上に落ちていた青い柿の実を子供に拾ってやる。

……この町に引越して来たときのことだ。たしか十月の薄ら寒い日だった。午後になって一層寒々としたアパートの畳でうたたねをしていると、私は白日夢を見た。三十年前の自分の住んでいた辺りの風景だった。私は潜在意識というものがこれほどまでに用意周到だとは思わなかった。おやおや、これでは、いくつになっても、ごく近い旅をしているようなものだと思った。

私がおどろいたのはその風景が陰うつな狭い路地だったことだ。それは近所が湿った陰気臭いところだったからではない。いたずらをしたり遊ぶに事欠かない気のおけない町内だったことは覚えている。それが私の記憶のなかでは暗い水のなかのようだ。

つまり、子供の私はその路地を、愉しい気持で歩いていたのではなく、叱られることを怖れながら、ぐずぐずと家の方へ曲って行く。

その町内から表通りに出るまでの道にむき苦しい駄菓子屋があった。土間に入ってはじめてそこに塩センベイと砂糖センベイが紙袋になって置いてあるのが見える。私はその土間で眼の悪い老婆がガラスケースの口から手をつっこんで紙袋を出すのを見守っていた。袋と交換に私は老婆の掌に勢よく貳十錢玉をすべりこませる。そして一目散に逃げる。私の渡した硬貨はニセモノだ。その頃父が赴任していた支那から帰って来て、土産にイギリスの硬貨を沢山くれた。きれいな記念メダルのつもりで子供に与えたそれらの硬貨のいくつかが目が悪い老婆に渡っているとは父も知らなかったはずだ。

白日夢を見たからでもないがアパートに移って来た最初のうちは散歩などする気になれなかった。それはその必要もないこともさることながら余裕もなかったからだろ

う。会社は残業も多かったし、家に帰ると自分の本も読みたかった。早い結婚のせいで生活費が足りずに私は苛々していた。放送局にいる先輩からラジオ台本の仕事をもらったりして形の上では一所懸命生活の苦勞を背負っているつもりでいた。その私を、妻は呑気だと思ったり夢想家だと思ったりしていたようだ。弟を預るなどという経済的負担を願ないやり方も、私が勝手に決めてしまったことなので、それに沿って彼女は新しいアパートを探して来たまでのものだ。その新しい生活がいままでの生活よりずっと金のかかるものだということを私は頭に入れていない。——しかしこういうことは気がついたからと言って特別いい智恵が浮かび方策が見つかるものだろうか。私はたしかに何かを当てにしている学生気分が抜けなかったのだろう。その反対に妻の方は弟の世話で洋裁とか刺繍とかの家計の足しになる仕事が手につかなくなったのをなげいていたのだろう。いやそして、その底にはもっと単純な理由の食い違いがよこたわっていたはずだ。それは以前にもっていた、自分たちは好きなもの同士でやりたいことをやっているという気持が崩れたことだ。言ってみればあれが二人の愛情だったのだ。私はこの愛情を幻影だなどと言うまい。また何度も手に入るものだとも思うま